

平成 26 年 6 月 26 日現在

機関番号：32702

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520649

研究課題名(和文)「移民言語としての日本語」の基礎的研究

研究課題名(英文) Reserch of the Japanese Language as Immigrants

研究代表者

富谷 玲子 (TOMIYA, Reiko)

神奈川大学・外国語学部・准教授

研究者番号：40386818

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,900,000円、(間接経費) 1,170,000円

研究成果の概要(和文)：移民言語としての日本語の特徴を分析するために、日本国内居住3年以上の日本語学習経験の乏しい外国人20人、その対照群としてハンガリーの日本語を専攻とする大学生(300時間程度の日本語学習経験者)を対象として、1時間程度の課題解決型の発話データの収集を行い、その一部を詳細に文字化した。その結果、日本語学習歴の乏しい日本国内居住者は流暢ではあるが語彙が乏しく正確な課題遂行には問題があるという傾向があることが明らかになった。

また、移民受け入れ先進国であるアメリカ、ドイツでの移民を対象とした現地語(英語・ドイツ語)教育の枠組みおよびその教育実践を視察した。

研究成果の概要(英文)：To analyze the characteristics of the Japanese language as migrants, we investigated two groups. . One was the 20 foreigners poor learning experience of Japan of three years or more residents of Japan. The other was a group of 10 Japanese learners in the University in Hungary. In both, we had collected data of about one hour speech problem solving. Further, I was made a part of the sound data in more detail characters. As a result, poor learning fluent Japanese residents of Japan has been shown that there is a tendency to use a poor vocabulary, there is a problem with the performance of precise tasks there. Apart from this, we express our education and practice of language teaching framework of local, we visited the United States and Germany.

研究分野：言語学

科研費の分科・細目：日本語教育

キーワード：移民言語 日本語自然習得 移民言語としての日本語 初期日本語教育 教室内学習者 アメリカの成人識字教育 ドイツにおける教室内学習者 ハンガリーにおける教室学習者

1. 研究開始当初の背景

1990年代から、日本に永住する移民が増加しつつある。その中には英語や日本語が堪能で日本経済の牽引役を期待されている高度人材と呼ばれる人々もいるが、一方では日本人と結婚し、就労制限のないビザを持つ女性や同じく就労制限のない日系人とその家族もいる。後者は、日本語を学ぶ機会が得られないケースが非常に多い。また、日本での就労が可能である外国人、さらには技術研修生、技能実習生などの中にも、日本語のが学習の機会を得ることができないまま日本に長期滞在、あるいは定住しているケースも多い。

上記外国人は、日常生活の中での日本語の接触からのみ日常会話レベル程度を習得していることが、先行研究から明らかになっている。一方でこのような教育の在り方に異議をとらえ、基本的人権としての言語権を保障するべきであるという主張も近年強まりつつある。

このような状況下、「教室内で日本語教育を受けた学習者（以下、教室内学習者と称す）」の発話と、「教室外での日本語との接触により日本語を習得した学習者（以下、自然習得者と称す）」の使用する日本語についてはまだ十分研究されているとはいえない。

本研究では、日本語教育を受けることを望みながらもその機会を得なかった日本国内の学習者に着目し、教室内学習者との日本語習得の差異について検討することとした。

2. 研究の目的

本研究では、以下の4点を研究目的とする。

1) 日本語環境下で生活する人々の日本語、即ち「移民言語としての日本語」の収集を行い、その特徴について検討することである。原則として日本語の授業に定期的に参加していないケースを取り扱う。日本語の授業を受けたことのない外国人と接触することは非常に困難であるため、外国人支援団体のコーディネータなどに協力をもとめ、山梨県内と神奈川県内でデータの収集を実施することとした。

2) 「移民言語としての日本語」の対照群として日本語環境下でない教室内日本語学習者の日本語の収集を行い、移民言語としての日本語との差異を検討する。具体的には、日本人や日本文化が非常に少ない海外の地域として、ブダペストの日本学科の大学生（約300時間修了者）の発話データを収集する。

3) これらの音声データを文字化して分析を行うため、文字化システムの開発を行った。この開発のために、実際の検討対象に近いデータとして、山形大学の留学生（中級）のデータの収集と分析を行い、文字化システムを作成した。但し山形大学の留学生のデータは、教室内外でも一般社会でも日本語に接しているため、移民言語としての日本語の分析対象とはしない。

4) さらに、移民言語としての日本語を取り巻く日本のあるべき制度やカリキュラムを明らかにすることを目的として、移民先進国であるアメリカとドイツの移民に対する教育内容に関する調査を行った。この二国を選定したのは、アメリカがもとより多民族国家でありその共通語として英語教育（ESL：第2言語としての英語教育）が移民に対して行われているのに対し、ドイツは戦後復興のために労働力（ガストアルバイター）を受け入れたことを契機としてその家族の呼び寄せなどから移民が急増し、それに伴い、移民を対象としたドイツ語教育（DaZ：第二言語としてのドイツ語教育）がアメリカとは異なる発想の下で構築されていったからである。この両国の移民に対する言語教育は、日本の将来を検討するために非常に有益であると考え、研究目的の一つとした。

3. 研究の方法

(1) 音声データの収集について

移民言語としての日本語、海外の大学生の日本語の発話データ収集は以下の要領で実施した

1) 移民言語としての日本語の音声データを収集した。まず、調査者が調査内容の詳細を対象となる日本に3年以上居住する外国人にやさしい日本語で十分に説明し、データ収集の承諾書を取り交わした。この承諾書は一枚は外国人が所有し、一枚を大学で研究代表者が保管した。

2) 学習者のプロフィールについて、会話形式で聞き取り調査を行った。調査内容は、日本滞在歴、日本滞在目的、家族構成、日本語および日本人との接触頻度と接触方法、日本語学習経験、学習者の家庭内言語（日本語か母語かなど）、日本語での読み書きのレベル、日常的に日本語で受けることの可能な緒支援などである。

3) 課題解決問題 1

課題は以下の通りである。

「あなたの故郷で一年のうち一番大切な日はいつですか。その日にはどのようなことをしますか。特別な食べ物や服装があったらそれについても話して下さい。」

この課題を外国人の調査対象者が理解できるように易しい日本語で伝え、何を話すか準備する時間を設けたうえで、絵や図が必要であれば、そのような非言語コミュニケーションも交えて、データ収集を行った。

4) 課題解決問題2

課題は以下の通りである。

簡単でわかりやすい4コママンガを用いて、何が描かれているのか、どのようなストーリーなのかについて、モノログで話してもらおう。マンガの中に描かれているモノの名称について日本語での語や表現を外国人調査対象者が知らない場合には、それについて、あらかじめ質問を受け、理解が十分にできてからデータ収集を始める。

5) 全体のデータ収集に関する感想を聞き、やさしい日本語での会話を続け、調査を終了する。

以上は、調査対象者の暮らしや困難の支援を行っている協力者と共に手法の一定化を試みたうえで、実際の調査は協力者(山梨県在住者1、神奈川県在住者1)が実施した。

なお、両地域で分析可能なデータはそれぞれ10である、

(2) 海外調査

上記1)~5)と同じ手法で、ハンガリーカーロリ大学の学生(約300時間の日本語学習を受けた学生)を対象とし、音声データの収集を富谷が行った。この調査で分析可能なデータは10を収集した。

(3) アメリカとドイツの言語政策について

1) アメリカでは、研究分担者である福永が、2回視察を行い、ESL(第二言語としての日本語)や青年識字教育、家族を対象とした識字教育をを担う官公庁を訪問して詳細な調査を行った。

2) ドイツでは、富谷がザクセン州の教育委員会から、学齢期の子どもを対象としたドイツ語教育であるDaZ(第二言語としてのドイツ語教育)のコンセプトおよびカリキュラムを聞き取り調査した。さらに、ザクセン州ライプツィヒ市にある移民集住地域の中学(5年生~12年生)でのDaZクラスに3カ月間週2回通い、実際の授業に参加して、その教育方法を調査した。

4. 研究成果

1) 移民言語としての日本語のデータ収集の実施方法を標準化することができた。これは、今後学習者コーパスを作る際にも利用可能なものであると思われる。

2) 移民言語としての日本語のデータは、約1時間の20のデータを分析可能なデータとして収集することができた。そのうち、文字化が完成したのは5ケースのみである。これは、非常に詳細な個所、例えば発話の重なりやフィルター、パラ言語まで詳細に分析しているため、作業に多大な時間を要するためである。今回はすべての音声データの文字化には至らなかったが、今後文字化の作業を続けていくこととする。

これまで文字化が終わった移民言語としての日本語のデータからは、非常に流暢に見えても、課題解決問題になると言葉につまるなど、語彙が乏しい傾向がみられた。文字化作業が終了してから、対照群(ハンガリーの教室内学習者のデータ)と比較し、分析結果をまとめる予定である。

3) 移民言語としての日本語の対照群となる、ハンガリーカーロリ大学での日本語学習者から10の分析可能なデータを収集することができた。しかしながら、移民言語としての日本語を優先したため、文字化にはまだ着手していない。

これらのデータは、流暢さはそれほど高くないとも、正確さに優れ、日本の文物についてもある程度の知識を有していることがわかった。また、学習にインターネットの日本語サイトが広く用いられていることが明らかになった。

4) アメリカのESLおよび成人識字教育、家族を対象とした識字教育については、2回にわたる視察の結果を2013年度の日本語教育学会秋大会のパネルセッションで、福永が口頭発表し、予稿集にも投稿した。

5) ドイツにおける移民を対象とした言語教育のカリキュラムに関しては、2012年度の日本語教育連絡会議(エアフルト大学:ドイツ)で富谷が口頭発表した。

また、ドイツにおけるDaZ(第二言語としてのドイツ語)のカリキュラムおよび実践例は、2013年度の日本語教育学会秋大会のパネルセッションで、富谷が口頭発表し、予稿集にも投稿した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計2件)

富谷玲子、福永由佳、山田泉、原千代子
(2013)(分担執筆)

『「家族支援」という視点からの初期日本語教育 ニューカマーがコミュニティの構成員として自立するために』、2013年度日本語教育学会秋季大会予稿集、査読有、83-94

富谷玲子・内海由美子(2011)

『外国人散在地域における日本語教育の基盤作りに向けて - 大都市と地方都市の比較から - 』、2011 年度日本語教育学会秋季大会予稿集、査読有 pp.95-100

〔学会発表〕(計3件)

富谷玲子、『言語政策の教育現場への反映』、日本語教育連絡会議、エアフルト大学(ドイツ) 2012年08月06日~2012年08月07日

富谷玲子・内海由美子、

『外国人散在地域における日本語教育の基盤作りに向けて - 大都市と地方都市の比較から - 』、日本語教育学会秋季大会、米子コンベンションセンター、2011年10月9日

富谷玲子、福永由佳、

山田泉、原千代子(2013) パネルセッション 『「家族支援」という視点からの初期日本語教育 ニューカマーがコミュニティの構成員として自立するために 』、2013 年度日本語教育学会秋季大会予稿集、査読有、83-94

〔図書〕(計0件)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

富谷 玲子 (Tomiya Reiko)
神奈川大学・外国語学部・准教授

研究者番号：40386818

(2) 研究分担者

内海 由美子 (Utsumi Yumiko)
山形大学・基盤教育院・准教授
研究者番号：20292708

福永 由佳 (Fukunaga Yuka)
大学共同利用機関法人 人間文化研究機構
国立国語研究所・日本語教育研究・情報センター・研究員
研究者番号：40311146

(3) 連携研究者

()

研究者番号：